

『三匹の子ぶた』に関する心理学的研究 (1)

— 物語の構造と伝えられる価値の分析を中心に —

筑波大学心理学系 福沢 周亮・小野瀬雅人・石隈 利紀

A psychological study of a fairy tale, "Three little pigs" (1) : Examination of the structures of the stories and conveyed values

Shusuke Fukuzawa, Masato Onose, and Toshinori Ishikuma (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305, Japan*)

A popular fairy tale, "Three little pigs", has variety in story development. In this study, the structures of a sample of five stories in Japanese and four in English, and the conveyed values were examined. In the setting in Japanese and English stories, when three pigs left the mother, they were encouraged to build their own houses and become "independent". However, only in English stories the pigs were expected to "seek their fortune". In story development in Japanese and English, "hard work" and "cleverness" to survive is valued using the third pig as a model. In Japanese "cooperation" of three pigs against the wolf is described while in English "competition" among three pigs for a stronger house is described. In the ending of some stories, the wolf, who was not "clever" enough to survive, was eaten by the third pig. Further studies including more stories and more languages are necessary.

Key words: "Three little pigs", basal readers, value education, cross-cultural, fairy tales.

1. 本研究の意義と目的

『三匹の子ぶた』は、日本ではもちろん諸外国においても、子どもから大人までよく知られている物語のひとつである。おそらく、この物語がどのような話であるかを説明できない人は、ほとんどいないであろう。物語に登場する「子ぶた」の親しみやすいキャラクターもさることながら、物語の展開そのものの単純さからくるわかり易さや、どんな人でも短時間で読める長さであることも、多くの人の記憶に残るひとつの理由となっているのかもしれない。

また、この物語は、わが国の幼児向け絵本シリーズでは、必ずといってよいくらい採用されるポピュラーなものでもある。そのため、大部分の幼稚園や保育園では、幼児用の図書として購入してあることが多く、したがって、この物語を「読み聞かせ」している幼稚園の教師や保育園の保母も多いようである。

こうして多くの幼稚園の教師や保育園の保母、場合によっては親による絵本の「読み聞かせ」に利用されたり、また、子ども自身も楽しみながら読む背景には、何らかの理由があるはずである。幼稚園の教師や保育園の保母、親にとっては子どもに教え伝えたい、人間としてもつべき何らかの価値がこの物語の中に存在し、一方、子どもにとっては、この物語のもつストーリーのテンポあるいは、展開の面白さ、などが存在するものと思われる。

ところで、この『三匹の子ぶた』の物語で登場するキャラクターは三匹の子ぶたと狼であるが、作者や翻訳者によって多少の変化がみられる。例えば、この他に母ぶたが登場するものもあるし、「人間」が登場するものもある。

日本で市販されている絵本をみると、いずれも「イギリスの昔話」とあるが、なかには、「英国のジェイコブスが古くから伝わる民話を集めた『イギリスの昔話』の中の一編」（永岡書店版）とあるものもある。

る。おそらく、ほかの民話、例えば『桃太郎』（滑川道夫、1980）がそうであるように、ある教育的価値を含んでいるため、物語として語り継がれる間に多少変化し、現在のかたちになったのであろう。

さて、この『三匹の子ぶた』とは、どのような物語なのであろうか。その概要をあらためて紹介すると次のようである。すなわち、三匹の子ぶたが、それぞれ、わら、木、レンガを集めて家を建てる。やがて狼がやってきて、家をひとつひとつ吹き飛ばして壊してしまうが、レンガの家だけは頑丈で壊れない。結局、狼は屋根の煙突から侵入しようとするが、子ぶたがその下に用意した、煮立ったお湯の入った鍋の中に墜ちて死んでしまう、というものである。

しかし、実際、わが国で市販されている『三匹の子ぶた』を読むと、様々なストーリー展開のものがある。あるものは、子ぶたの建てた家が狼に襲われるたびに、その子ぶたも食べられてしまい、最後に残ったレンガの家を建てた子ぶただけが狼を撃退する。またあるものは、子ぶたが狼に襲われると別の子ぶたの建てた家に逃げ込み、3匹が協力して狼を撃退するという展開である。結末にしても、子ぶたを襲った狼は、結局、煙突から侵入することになるが、子ぶたの用意した鍋の中に墜ちて、大火傷をし逃げ帰るものから、そのまま死んでしまうものまである。つまり、日本語版を見るだけでも、様々なストーリー展開が存在するのである。

このように、同じタイトルであっても作者や翻訳者によって、その内容に相違がみられる。当然のことながら、伝えたい価値、つまり教育的価値も異なると考えられるが、この問題に焦点をあてた研究はほとんどみあたらない^{1,2}。おそらく、同じ『三匹の子ぶた』というタイトルでも、話の展開が異なることがあることすら知らない人も多いのではなかろうか。

そこで本研究では、『三匹の子ぶた』という日本人の誰もが知っている物語を、心理学的に検討する

ことにした。すなわち、物語の構造と伝えたい価値の分析、使用される語彙の分析、子どもにとって望ましい価値を含む物語の在り方などについて、実証的に検討することにした。さらに、子どもに伝えたい価値は、文化によって異なると考えられるので、様々な文化をもつ国の父母や幼児教育関係者を対象とした検討も行いたいと考えている。

本論文では、その第1報として、まず、この物語の日本語版5編とその英語版4編を材料として、その内容（場面設定、展開、結末）の構造とそれが伝えようとしている価値の分析を行う。英語版であっても日本語版であっても、様々なストーリーの展開があるからである。

2. 日本語版の分析

1. でも述べたように、日本で市販されている『三匹の子ぶた』には、様々なストーリー展開のものがある。そこで、ここではまず、5種類の絵本について、その構造およびそれが伝えようとしている価値を明らかにする。

2-1 分析対象とした絵本

A1: 『三びきのこぶた』 福音館 1967年

A2: 『三びきのこぶた』 福音館 1971年

B1: 『三びきの子ぶた』 講談社 1966年

B2: 『3びきの子ぶた(デイズニー版)』 講談社 1973年

C: 『三びきのこぶた』 永岡書店 1990年

本研究では、Table 1にあるような3つの部分、すなわち「場面設定」「展開」「結末」にわけ、さらにそれぞれの項目ごとに考察する。

2-2 場面設定

登場人物

いずれの絵本も、3匹の子ぶたが登場するところは共通しているが、Cだけは3匹の子ぶたそれぞれに性格づけをしている点が異なる。一番上の子ぶたは「なまけもの」、二番目は「くいしんぼう」、三番目は「はたらきもの」となっている。

また、母ぶたはB2を除くすべての絵本に登場するが、場面設定においては、狼は日本語版ではまったく登場しない。

家を出て行く理由

これについては、2つのパターン(A1・A2とB1・C)がある。A1・A2では、それぞれ「おかあさんぶたはびんぼうで、こどもたちをそだてきれなくなって、じぶんでくらししていくように、三びきをよそにだしました。」「みんなにたべさせるほどたくさんのおたべものがありませんでした。そこでめ

¹ 講談社版(西山敏夫・作、1966年)の序文には、「イギリスの昔話で、親のもとを離れ、ひとり立ちになって、困難に打ち勝っていく、元気な子ぶたの話です。(中略)れんがの家は、造るのにはたいへんでも、どんなに役に立ったか、おおかみの危険から、どうやって逃れたかなど、読み進んでいくにつれて、自然に、世の中を生きていくには、勤勉と知恵と勇気のたいせつなことを教えています。」とある。

² アメリカにおける基本的読み物(Basal readers)については、Ozmon, JR. (1968)が、それぞれの基本的読み物に含まれる価値と5つの教育哲学(永遠主義、本質主義、進歩主義、改造主義、実存主義)との関係について検討している。

Table 1 『三匹の子ぶた』(日本語版)の内容分析

物語の内容/物語の種類	A 1	A 2	B 1	B 2	C
■場面設定					
登場人物					
三匹の子ぶた	×	×	×	×	×
母ぶた	×	×	×		×
家を出ていく理由					
自分で家を建てる(自立)			×		×
貧しいため(仕方なく)	×	×			
■物語の展開					
一番目の子ぶた					
わらの家	×	×	×	×	×
わらを運ぶ人に会った	×	×	×		
* わらを自分で探しに行った					×
踊ったり笛を吹いたりした				×	
怠け者だった				×	×
すぐに壊れた	×	×	×	×	×
二番目の子ぶた					
木(ハリエニシダ)の家	×	×	×	×	×
木を運ぶ人に会った	×	×	×		
* 木を自分で探しに行った					×
歌ったりヴァイオリンを弾いたりした				×	
怠け者だった				×	×
すぐに壊れた	×	×	×	×	×
三番目の子ぶた					
レンガの家	×	×	×	×	×
レンガを運ぶ人に会った	×	×	×		
レンガを自分で探しに行った					×
勤勉者だった				×	×
自分は安全だと言った					×
頑丈で壊れなかった	×	×	×	×	×
狼と一番目の子ぶたとの関係					
狼は三匹の子ぶたが皆、家を建てた					
後で現れた				×	×
家を吹き飛ばしてしまった	×	×	×	×	×
子ぶたを食べてしまった	×	×			
二番目の子ぶたの家に逃げた			×	×	×
狼と二番目の子ぶたとの関係					
狼は三匹の子ぶたが皆、家を建てた					
後で現れた				×	×
家を吹き飛ばしてしまった	×	×	×	×	×
子ぶたを食べてしまった	×	×			
三番目の子ぶたの家に逃げた			×	×	×
狼と三番目の子ぶたとの関係					
かぶ畑の話をした	×	×	×		
りんごの木の話をした	×	×	×		
祭や市がある話をした	×	×	×		
煙突から侵入した	×	×	×	×	×
鍋に落ちて死んでしまった	×	×	×		
子ぶたが狼を晩ご飯に食べた	×	×			
狼が大火傷をした				×	×
狼が逃げた				×	
■結 末					
子ぶたはずっと幸せに暮らした	×	×			
三匹の子ぶたは仲良く暮らした			×	×	×

注1 A 1 : 福音館(瀬田・訳), A 2 : 福音館(石井・訳), B 1 : 講談社(西山・作),

B 2 : 講談社(ディズニー版), C : 永岡書店

注2 *は、日本語版のみにあるもの。

ぶたは、こどもたちにじぶんではたらいでたべていくように、といてよのなかへだしてやりました。」とあるように、「貧しくて仕方なく」という意味合いが強い表現になっており、「世間の厳しさに耐えること」を伝えようとしている。

それに対して、B1・Cではそれぞれ「みんなおきくなったので、あるひ、おかあさんは、『もう、ひとりでくらさなければいけないわね。』』といました。『ぼくたち、いえをつくるんですね。』三びきのこぶたは、げんきにおかあさんのいえをでていきました。『ある日おかあさんぶたがこぶたたちにいました。『おまえたちも大きくなったのだから、それぞれじぶんのいえをたてなさい。』おかあさんにはげまされて、三びきのこぶたたちはげんきにいえをでていきました。』とあるように、A1・A2のような「仕方なく」という雰囲気は感じられない。むしろ、子どもの「自立」を促すような表現となっている。

2-3 物語の展開

一番目の子ぶた

わらで家を建てたことと、それがまもなく狼によって壊されてしまったことは、全ての物語に共通している。しかし、わらをどこで手に入れたかについては物語によって異なっている。それについては、B2では書かれていないが、Cでは「はたけからたくさんわらをあつめて」とあるように子ぶたが自分で探してくる。A1・A2・B1では、いずれも「わらのたばをもつひと」に出会い、その人からもらっている。

また、家を建てた後どうしたかについて、A2では『『もうできた、わらのいえ。』(中略) まあ、にいさんたちは、なんてはやいんでしょ。けれど、おとうとぶたはまだでした。』とあり、二匹の兄さんぶたが、笛を吹いたりヴァイオリンを弾いたりした絵が描かれている。Cでは、「わらのいえをたてたブー太は、トンきちとコロちゃんをよんできてじまんをしました。『どうだい、ぼくのいえは。これでのんびりひるねができる。』ブー太は大いばりです。』つまり、最初に「性格づけ」したように一番目の子ぶたは「なまけもの」であることが強調されている。

二番目の子ぶた

木(ただし、A2はハリエニシダという種類の植物)で家を建てたこと、それがまもなく狼によって壊されてしまったことは、全ての物語に共通している。しかし、木をどこで手に入れたかについては、一番目の子ぶたの場合と同様、物語によって異なっている。B2では書かれていないが、Cでは「たき

ぎをあつめてきて」とあるように、子ぶたが自分で探してくる。A1・A2・B1では、いずれも「木のたばをもつひと」に出会い、その人からもらっている。

また、家を建てた後どうしたかについて、B2では『『もうできた、まるたのいえ。』まあ、にいさんたちは、なんてはやいんでしょ。けれど、おとうとぶたはまだでした。』とあり、前述のように、二匹の兄さんぶたが気楽に遊んでいる絵が描かれている。Cでは、「くいしんぼうのトンきちもまけずにいえをつくります。たきぎをあつめてきてトントコトントコくぎをうちました。『はい、できあがり。』もうおなかがすいています。『では、しょくじにしよう。』』となっている。これも、一番目の子ぶたと同様、二番目の子ぶたが「くいしんぼう」であることが強調されている。

三番目の子ぶた

レンガで家を建てたことと、それが頑丈であったため、狼はそれを壊すことができなかったことは、全ての物語に共通している。しかし、レンガをどこで手に入れたかについては、物語によって異なる。B2では書かれていないが、Cでは「コロちゃんはレンガをあつめにでかけました」とあるように、子ぶたが自分で探している。A1・B2・B1では、いずれも「レンガをはこぶひと」に出会い、その人からもらっている。

家を建てる過程で、B2では「れんがをひとつずつつんでは、セメントをべたべた。『めんどうくさいじゃないか。』『のろまだなあ。あはははは。』にいさんたちにわらわられても、おとうとぶたは、いっしょうけんめいに、さいごまでべたべた。」と、「勤勉さ」を表す描写がある点に特徴がある。

さらに、Cでは『『あれえ、コロちゃんのいえはまだできないの。のろまだなあ。』ブー太とトンきちがいいました。『レンガのいえは、じかんはかかるけど、じょうぶだからどんなあらしがきてもへいきだよ。』』とあるように、三番目の子ぶたの「勤勉さ」と「自信」を強調している。

狼と三匹の子ぶたの関係

子ぶたがわらの家を建てるとすぐに狼が現れたか、それとも三匹とも家を建てた後でやってきたのかについては2つの展開パターンがある。三匹の子ぶたがそれぞれ家を建てるごとに狼が現れるもの(A1・A2・B1)と、三匹とも家を建てた後で狼が現れるもの(B2・C)である。

狼がわらの家を吹き飛ばしてしまうのは、全ての物語に共通しているが、その後、A1・A2では狼が子ぶたを食べてしまい、B1・B2・Cでは二番

目の子ぶたの家に逃げることになっている。

また、わらの家と同様に、狼が木の家を吹き飛ばしてしまうのも、全ての物語に共通しており、その後、A1・A2では狼が子ぶたを食べてしまい、B1・B2・Cでは二番目の子ぶたの家に逃げるパターンもわらの家のときと同じである。

三番目の子ぶたが建てたレンガの家が、狼が壊そうとしたにもかかわらず壊れなかった点は、全ての物語に共通しているが、その後、さらにあの手この手を使い襲ってくる場所は、物語によって異なる。A1・A2・B1では、いずれも、かぶ畑の話やりんごの木の話、さらには祭や市の話までもちだして、子ぶたを外におびき出そうとするが、B2とCではそうした話はまったくでてこない、つまり、だまされずに生き抜く「利口さ」の大切さが強調されているものから、そうした記述のないものまでであるようだ。

また、狼が仕方なく煙突から侵入する点は、全ての物語に共通するが、その後の展開は様々である。A1・A2・B1では、子ぶたが煙突の下に用意した鍋に落ちて死んでしまい、A1・A2に至ってはその狼を晩ご飯に食べてしまう。一方、B2では鍋の中で大火傷をするにとどまるが、さらにCではその後逃げてしまったとある。つまり、一見、残酷に見えるものから、その表現を抑えたものまであるといえる。

なお、Table 1にはないが、Cでは、三匹の子ぶたが、「協力」して狼を追い返すという描写もある。

2-4 結末

ここでどう終わるかが、最終的に作者が子どもに伝えたいことになると思われるが、これも、場面設定や展開と同様、2つのパターンがみられる。ひとつは、A1・A2のように「それからさき子ぶたはずっとしあわせにくらしました。」で終わるもので、もうひとつは、B1・B2・Cのように生き残った三匹の子ぶたが、「仲良く協力しあって暮らした」(協調性)とあるものである。

前者はどちらかといえば、厳しい闘いを乗り越えてやっと幸せをつかんだ、という意味合いが強いが、後者では、皆で協力して幸福はつかむものである、といった意味合いが強いようである。

3. 英語版の分析

次に、英語版をTable 2にそって分析する。

3-1 分析の対象とした絵本

D1: "The story of the three little pigs" in "English fairy tales" 1970 Puffin Books

D2: "The three little pigs" 1965 Ladybird Books

E1: "Walt Disney's three little pigs" 1972 Random House

E2: "Walt Disney's the three little pigs" 1953 A Little Golden Book

上記のD1とD2はイギリス版、E1とE2はアメリカのディズニー版である。

3-2 場面設定

登場人物

場面設定で、3匹の子ぶたが登場するところは、英語版においても共通している。母ぶたはE2を除くすべての英語版に登場し、E1では狼が登場する。またD2とE1では、母ぶたが子ぶたに「狼に捕まらないよう」注意する。

家を出ていく理由

日本語版と同じように、「食べさせるものが十分にないから」という貧しさが理由になる場合(D1)と、「自分の家を建てて」自立する時がきたからという場合(D2・E1・E2)とがある。D1とE2では、さらに、「seek their fortune(s) (成功を求める)」ことが子ぶたに期待されており、積極的な雰囲気を感じられる。

3-3 物語の展開

一番目の子ぶた

わらで家を建てたことと、それが狼によって壊されたことは、英語版でも共通している。イギリス版(D1・D2)では、子ぶたは「わらの束を持つ人」からわらをもらうが、アメリカ版(E1・E2)ではそういう人は登場しない。

また、アメリカ版では、一番目の子ぶたを、早く仕事をすませて"dance and play"を楽しむ「怠け者」として強調しているが、イギリス版ではそうではない。しかし、D2では、一番目の子ぶたが家を造るのを、2匹のぶたが見ていて「"stronger house" (もっと頑丈な家)を建てる」ことを宣言しており、「競争」を描いているといえよう。

さらに、場面設定から狼を登場させているE1では、狼が一番目の子ぶたのことを観察しており、子ぶたを食べる機会を待っている。

二番目の子ぶた

木で家を建てたことと、それが狼によって壊されたことは、英語版でも同様である。「木の束を持つ人」から木をもらう場合(D1・D2)と、そういう人が登場しない場合(E1・E2)とがあるのも、英語版と日本語版は共通している。

アメリカ版では、二番目の子ぶたを"sing and play"が好きな「怠け者」として描いているが、イギリス版ではそうではない。またD2では、二番目

Table 2 “Three little pigs” (英語版)の内容分析

物語の内容/物語の種類	D1	D2	E1	E2
■Setting				
Three little pigs	×	×	×	×
Mother	×	×	×	
* Wolf			×	
* Warning for the wolf		×	×	
Leaving mother				
Building own house		×	×	×
Not enough to keep	×			
Seeking their fortune	×			×
■Story				
First little pig				
Strow houses	×	×	×	×
Man with strow	×	×		
Not very strong			×	×
* The wolf watching			×	
* The two other pigs watching		×		
Danced and played(flute)			×	×
Lazy			×	×
Second little pig				
Sticks	×	×	×	×
Man with sticks	×	×		
Not very strong			×	×
* The wolf watching			×	
* The third pig watching		×		
Sang and played(fiddle)			×	×
Lazy			×	×
Third little pig				
Bricks	×	×	×	×
Man with bricks	×	×		
Strong		×	×	×
* The wolf watching			×	
Hard work		×	×	×
* Rest and play			×	
I'll be safe		×		×
The wolf - the First pig				
Came before the other pigs built houses after the other pigs built houses	×		×	×
Huffed and puffed	×	×	×	×
Ate	×	×		
Ran to the second pig			×	×
The wolf - the Second pig				
Came before the third pig built a house after the third pig built a house	×	×	×	×
Came as sheep			×	×
Huffed and puffed	×	×	×	×
Ate	×	×		
Ran to the third pig			×	×
The wolf - the Third pig				
Huffed and puffed	×	×	×	×
Turnips	×	×		
Apples	×	×		
Fair	×	×		
Down the chimney	×	×	×	×
Hot water	×	×	×	×
End of the wolf		×		
Ate the wolf for the supper	×			
Ran out			×	×
■Ending				
Happy three pigs			×	×
* Not so bad wolf			×	
* Too clever third pig		×		
Third pig lived happy	×			

注1 D1: Puffin Books, D2: Ladybird Books, E1: Random House, E2: A Little Golden Books

注2 *は、英語版のみにあるもの。

の子ぶたが家を建てるのを三番目の子ぶたが見ている「もっと頑丈な家を建てる」といっている。さらにE1では、狼が二番目の子ぶたをじっと見ている。

三番目の子ぶた

レンガで家を建てたことと、それが頑丈だったので、狼がそれを壊すことができなかったことは、英語版でも共通している。また、「レンガを運ぶ人」に出会う場合(D1・D2)とそういう人が登場しない場合(E1・E2)があるのも同様である。

D1を除くすべての英語版では、三番目の子ぶたの「“hard work” (勤勉)とその結果としての頑丈な家」を強調している。さらに、E1では、頑丈な家を建てた後、「Now I have time to rest and play」(さあ、これで休息し遊ぶことができる)」と、勤勉の後の「休息と遊び」を描いている。またE2では、他の2匹の子ぶたが遊ばないで働いている三番目の子ぶたを笑うのに対して、三番目の子ぶたは「狼が来ても、ぼくは“safe”(安全)で、きみたちは後悔するよ」という。冬に備えて働くキリギリスと遊んで暮らすアリの物語と似ている。「これで狼はぼくを捕まえて、食べることはできない」と「自信」を強調しているのは、D2でも見られる。

E1では、やはり狼が三番目の子ぶたを観察し、食べる機会をねらっている。

狼と三匹の子ぶたの関係

狼と三匹の子ぶたの関係については、英語版は日本語版ときわめて似ている。一番目の子ぶたが家を建てる時すぐ狼が現れた場合(D1)と三匹とも家を建て終えた後でやってきた場合(D2・E1・E2)とがある。D1では、二番目の子ぶたが家を建てた後もすぐに狼が現れた。

イギリス版(D1・D2)では、一番目と二番目の子ぶたは狼に食べられてしまうが、アメリカ版(E1・E2)では、一番目の子ぶたは二番目の子ぶたのところ逃げ込み、二番目の子ぶたはその一番目の子ぶたと一緒に三番目の子ぶたのところ逃げる。

狼がわらの家と木の家を吹き飛ばしたが、頑丈なレンガの家は壊せなかったことも、英語版でも同様である。アメリカ版では、二番目の子ぶたの家に現れるとき、狼は羊の姿をしてきたが、子ぶたに見破られてしまう。イギリス版では、三番目の子ぶたの家が頑丈で壊れないので、狼はあの手この手(かぶ畑、りんごの木、そして祭や市の話)を使い襲ってくる。D2では、この狼の工夫の理由を「こいつは“clever”な(賢い)子ぶただから、捕まえるためには、“his friend”(友達)のふりをしなくてはいけない」としている。狼にしろ子ぶたにしる、厳しい世界を

生き抜いていくには、利口でなくてはならないということを強調しているようだ。

狼が煙突から侵入するのは、英語版も共通している。アメリカ版では、狼は鍋の熱湯で落ちた後逃げていくが、イギリス版では、狼は死んでしまうか(D2)、煮て夕食に食べられてしまう(D1)。残酷さの表現の程度が、作品によって異なっている。

3-4 結末

アメリカ版では、狼が逃げて行った後、三匹の子ぶたが頑丈なレンガの家で仲良く楽しく暮らす。頑丈でない家を建てた、一番目と二番目の子ぶたも、最後は幸福になる訳である。さらにE1では、狼は丘の上で寂しく一人で暮らし、決して子ぶたを食べない、「not so bad”(そんなに悪くはない)者になる。すなわち、心を入れ替えた狼と描写している。いろいろ人種も性格も違う人間が、仲良く平和に暮らせるという、アメリカのあるいはディズニーの希望や信念を象徴しているといえるかも知れない。

イギリス版のD1では、三番目の「子ぶたはそれからさきずっとしあわせにくらしました。」で終り、D2では「三番目の子ぶたは狼には賢過ぎました。」で完了する。現実の世界は厳しいもので、そこで利口な者だけが生き残るということを、作者は伝えているようだ。

4. まとめと今後の課題

日本語版および英語版の『三匹の子ぶた』を検討したところ、様々なストーリー展開があることが確かめられた。とくに、日本語版はもともと英語版を翻訳したものが多いいせいか、英語版にあるいくつかの展開パターンに類似していた。しかし、部分的には、英語版にあるものを削除したり逆に新たに創作したりして、日本の文化や慣習に合わせた価値を含むストーリー展開となっている(Table 3)。

例えば、「場面設定」においては、母親ぶたが三匹の子ぶたを家から送り出す際に、子ぶたたちに話す言葉の内容から、「自立」や「世間を生き抜く厳しさに耐えること」に価値をおくと思われるものは日本語版と英語版に共通しているが、「成功(ひと旗あげる)」のためというのは英語版にしかみられない。

また、「展開」のところでは、三番目の子ぶたとおして「勤勉の大切さ」を教えようとするものと、同時にそうした勤勉によって本当の「自信」も生まれてくることを伝えようとする点や、だまされずに生き抜くための「利口さ」を伝えようとする点は、日本語版と英語版に共通しているが、「勤勉」だけ

Table 3 物語が伝えようとしている価値

	日本語版	英語版
場面設定	世間の厳しさに耐えること【A1・A2】 (貧しいので仕方なく家を出す) 自立【B1・C】 (子どもの自立を促す)	世間の厳しさに耐えること【D1】 (食べるものがないので家を出す) 自立【D2・E1・E2】 (自分の家を建てる) 成功【D1・E2】 (ひと旗あげる)
展開	勤勉【全】 自信【C】 協力【C】 利口さ【A1・A2・B1】 (厳しい世界を生き抜くための)	勤勉【D2・E1・E2】 競争【D2】 自信【D2・E2】 勤勉のあとは休息し遊ぶ【E1】 利口さ【D2】 (厳しい世界を生き抜くための)
結末	勤勉者が幸福になる【全】 利口者が生き残る【A1・A2】 協調性【B1・B2・C】 (力を合わせて仲良く暮らす)	勤勉者が幸福になる【E1・E2】 利口者が生き残る【D1・D2】 平和と協調【E1・E2】

注【 】内は、物語の記号を表す。

でなく「その後の休息と遊び」にも価値をおいているのは英語版のみである。まさに日本の文化と欧米の文化の差異を見事に映し出している記述といってもよいだろう。さらに、日本語版では、狼に対して三匹の子ぶたが「協力」して闘うことにより、「協力」の大切さも伝えようとしている。また、英語版では、頑丈な家を建てるという点で、兄弟内での「競争」も描かれている。

最後の「結末」では、展開のところとも関連するが、三番目の子ぶたに象徴されるように、「勤勉者が幸福になる」のは全ての物語に共通している。しかし、みんなで協力することの大切さ(協調)や、狼が一番目と二番目の子ぶたを食べてしまい、最後に残った子ぶたが、狼を殺し晩ご飯に食べてしまう結末に象徴されるように、「人生の厳しさと残酷さ」を伝えようとするものもある。それとは対照的に、子ぶたも狼も死ぬことはなく、みんな仲良く暮らすということから再び「平和と協調」の大切さを伝えようとするものもある。これらは、英語版、日本語

版に共通しているが、英語版のあるものは、狼が改心して悪さをしなくなった、とするものもある。

以上のように、作者や訳者は、登場するキャラクターをうまく使い分けながら、ある「価値」を読者に伝えようとしていることが確かめられた。しかしながら、この構造とそれに含まれる価値の分析は日本語版と英語版のみで、対象とした本の数も少なく、したがって、この『三匹の子ぶた』という物語の伝えようとする価値の一部をとりあげたに過ぎない。今後は、さらにアメリカ、イギリス、日本だけでなく、他の国に翻訳されたものの検討も必要になるだろう。

また、本論でとりあげた「価値」は、あくまで筆者らの解釈による「価値」であるが、対象によって、例えば、親や幼稚園の教師の場合と子どもの場合では、こうした「価値」のとらえ方も異なる可能性がある。さらに、異なる文化圏の国々の人を対象とした場合では、より一層の差異があらわれると思われる。今後はこうした視点からの研究も発展的課題としてあげられるだろう。

分析の対象とした文献

- A 1 瀬田 貞二(訳) 1967 三びきのこぶた 福音館
 A 2 石井 桃子(訳) 1971 三びきのこぶた 福音館
 B 1 西山 敏夫(作) 1966 三びきの子ぶた 講談社
 B 2 上地ちづ子(文) 1973 三びきの子ぶた(ディズニー版)講談社
 C 卯月 素子(構成・文)1990 三びきのこぶた ジェイコブス作 永岡書店
 D 1 Joseph Jacobs 1970 "The story of the three little pigs" in "English fairy tales" Puffin Books

- D 2 Vera Southgate 1965 "The three little pigs" Ladybird Books
 E 1 Barbara Brenner 1972 "Walt Disney's three little pigs" Random House
 E 2 Milt Banta & Al Dempster 1953 "Walt Disney's the three little pigs" A Little Golden Book

引用文献

- 滑川道夫 1980 桃太郎像の変容 東京書籍
 Ozmon, JR., H.A. 1968 Value implications in children's reading material. *The Reading Teacher*, **22**, 246-251.